

# 言語についての一考察

大 森 孝

## 序

我々の生活に欠く事の出来ない言語について、これ迄多くの研究者等により、種々科学的に分析されて来たのであるが、ここに其等の文献を参照しながら、その一端を筆者なりに、述べて見たいと思う。

**A**、先づ言語とは何であるかについて考えて見たい。

種々説があるが、一つの説は、言語について、次の様に述べて居る。「言語とは、一つの考が人から人へと伝えられる音声上の記号の、任意的システムである。」此の説について考えて見ると、言語が「任意的」である<sup>(1)</sup>と云う事は、その語を話す者の、アグリーメントによってのみ存在する事になる。例えば、cat が cat と呼ばれる本質的理由はないのである。

又言語は、一定の構造を持つ故に、一つのシステムである。そして、このシステムの研究は、文法の主題となる。

一つの言語を覚えると云う事は、一つの新しい習慣を形成する事であると思う。

我々は、外国語を読む時に、或る考えを、母国語を通して考えがちである。出来れば、母国語の干渉なしに、その考え、そのものの中に入って行く事がベターである。しかし、これは、シチュエーションの問題もあり、随分と困難である。しかし、出来るだけ母国語の、干渉を下げて行く様に努めるべきであると思う。習慣の形成は、心理学者によると、平常望んだ行為を、くりかえす事と、その補強 (reinforcement) によって、成し遂

げられると云われている。補強とは、言語をつくり出す事が、学ぶ者に興味ある効果のある知識をもたらす事を意味する。  
(2)

**B**、次に言語（特に外国語）を学ぶ場合の、二、三の問題について考えて見たい。

其の一つは、才能 (talent) の問題である。凡ての普通の人、少なくとも一つの言語、即ち母国語を、覚える充分な才能をもっている。母国語を覚えるのに用いられる過程は、学校教育では、中々再現出来ない。人は母国語を、その言語を覚えたり、用いたりする能力の少ない幼児期に覚えるのである。それ故、言語の一つである外国語の場合も、才能不足の為に、語学の勉強には向かないと断言は出来ない。外国人と結婚した様な時は、シチュエーションの変化で、その人の語学力は、自然に向上するものである。

其の二つは、言語は difficult (難かしい) であると言う事である。

或る言語は、他の言語より覚えるのに難かしいと言う考えがある。外国語を学ぶのに、障害になる主なるものは、前述した通り、母国語の干渉である。外国語を学ぶ者に取っての困難さは、その学ぶ者の母国語に対して  
(3)  
の類似性に対する逆の割合にあると言う事である。

例えば、支那語 (中国語) は、英語を母国語とする者にとっては、ドイツ語より難かしいし、タイ語や、朝鮮語を母国語とする者にとっては、ドイツ語より易しい、それ故、言語其れ自身について、易しいとか、難かしいとかは云えないのである。

次に外国語を習得するには、秀れた知力を必要とすると一般に云われて居るが、一面考えて見ると、母国語を習得するには、精薄児でも成功すると云う事である。この事を考えて見ても、或る程度の語学力をつける

のには、特に秀れた知力を必要とするものではないと云える。

外国語をマスターするとは、四つのスキル、即ち、**reading, writing, hearing (understanding), speaking** を習得する事であると云われている。言い換えれば、人は最初に読む力を得、次に書く事に移り、それが話された言語を、理解する事を学び、終りに、話す事を習得する事である。然し聴覚口頭教授法 (Audiolingual Method) 等が用いられる様になると、この順序は逆の順になって来ている。

### C, 言語と文字について

人類は、言語を使う事によって、他の動物と区別される様になった。人類の過去に於て、我々の知る限り、人類は常に言語を用いて居り、言語の起源を推量する事は、人類の起源を推量する事になろう。これに対して、文字の現われたのは、比較的新しく、約2000年か3000年前である。文字と<sup>(4)</sup>は、目に見える記号によって、言語を記録するための一つの工夫であり、文字が使用されていたのは、未だ少数の言語社会の中丈けであり、極く少数に限られて居た。大部分の人々が、字が書ける様になったのは、最近の事である。言語は、その話し手が、文字を書けようと、書けまいと、それ自体何ら変りはしない。又文字の書ける者が、書き方について語る事は容易であるが、これは、この技能を身につける時に、話し言葉を使って教わったからであり、又、書かれた記号は永久的なものである故に、その時の手の動きが、記録として残されているからである。これと反対に、言語習得の時を考えて見ると、言語を使って説明する事は出来なかったし、又、その時使った言語音も、すぐ消えてしまうので、話者にとって、言語について語るといふ事が、非常に難かしかつたのである。

我々が知り得る人類生存状態に於ては、身振りとか、信号とかの手段の

中で、漠然たる手まね以上に出ているものは、すべて、言語を基礎として生まれ、言語に代るべき手段として、つくられたものである。又、言語とそれから派生した代用物とを、混同する事があるが、即ち、言語の代用物から、言語が生れたとか、又は、この代用物に、何かの独立性を、認めると云う事がある。文字の改革が、種々の方法で行われても、その為に文字の表わしている言語そのもの迄、影響を受ける事はない。例えば、河を river と書き現わしても、河と云う言語そのものが、本質的に変る事はないのである。同じ様に sutra を、経文と云う漢字で代えてみても、sutra そのものの意味が、本質的に変る事はないのである。

或る言葉、特に、英語や、フランス語に於て、話し言葉と、書き言葉が大きく違っている事が多い。特に英語では、つづりと発音が、結びつかない事が多いので、ひどく不便である。

人類が利用した古い言葉に、絵文字と表意文字がある。こうした文字は分離出来ない記号から出来ていて、この記号が、或る概念（犬、歩く等）を象徴化している。絵文字は、連想を通して、記号を直接内容に結びつけるものであり、話し言葉で耳に作用する様な言語の音表現を、考えていない。実例として、多く用いられている交通信号（文通標識）が、それである。又、古代エジプト人の象形文字は表意文字で、象徴となったもの（人、鳥等）と、そっくりであった。しかし、次第に、要求が増加するにつれてこうした文字だけでは、不十分になって来て、そこに、説明的補足記号によって、表意文字の意味を、一層正確にする必要が、出て来た。そこで、書き言葉が、発達して来るのである。

(5)

#### D、言語の機能について

言語は、個人と個人との間に、正確な相互作用を起させる事により、人

間の行為を、動物の行為とは、著しく異なったものにさせる役目を果している。動物の間にも、そう云う相互作用があったとしても、それは、ほんの僅かな、いつも同じ型にはまった変化のないものである。

人の場合、言語音が、一つの刺激として、他の人々に作用すると、その人々は、話者の立場に、生理的に有利な結果を与える様な行動を取る。一例を述べると、食物を必要とする者が、身体的能力で、それを手に入れない時は、言語を使う事によって、他人に、それを取って貰う事が出来る。

又、同じ言語社会における個々の成員は、結合されて、更に高次の、有機的組織体をなしている、この様な組織体は、社会的有機体と呼べよう。この有機体は、本来、言語社会、即ち、一つの言語を認める人々の地域社会である。

言語的発話自体が、水準を異にすれば、比較的最終的な反応の役を果たすこともある。例えば、専門語の用法について、論じた末に、意見が一致する場合などが、これである。又、一つの連結した言語を、徹底的に追及して行くと、何らかの非言語的行為が、形を変えたものに到達出来る筈である。詩や、物語が、言語を越えた結果に到達するのは、このためである。

一つの言語形式を、発話すると云う事は、単に反応であるばかりでなく話者自身への刺激として役立つのである。発話の中には、話者の刺激によって、直接に条件づけられる度合いの強いものと、聴者の反応によって、直接に条件づけられる度合いの、強いものがある。普通に言語を使う場合には、意味のこの二つの面が、言語形式にしっかりと結びつけられている。つまり、言語を習得すると云うのは、話者の役割と、聴者の役割を、特に区別をしないでやれる様に、訓練されると云う事である。

E, 次に、言語の集団的な面と、個人的な面の問題を考えて見たい。

個人が、周囲の者に理解されようとするれば、一つの言語規範に従う必要がある。しかし、他方では、個人が、一つの言語規則に縛られると云っても、その表現手段を工夫するのに、或る程度の自由がある。言語の個人的な面と、集団的な面の問題では、種々説がある。

或る学派は、言語の社会的特徴や、個人の及ばぬ規則や、規範を強調し、言語の新しい創造は、共通の場に於てしか起り得ないと、主張する。或る学派は、話者の立場から、言語活動時における個人の創造行為を特に強調し、言語活動が行なわれる度毎に、言語は、新しく創造される事を主張する。例えば、proportion (割合) indifference (無関心) moral (道徳) の様な語は、西欧の文化言語が、借用したラテン語であるが、もとは、ラテン語になかったもので、一個人の作であると云われている。

(6)  
しかし、新造語は、音形成や、音結合の言語規則と一致し、言語の文法体系に適合する必要がある。新造語を普及出来るには、社会的に、指導的な特別な地位が必要である。個人的な主導性が、集団内で、影響力を及ぼすか、どうかは、集団的事情による。新造語が、言語社会の標準語となる迄は、言語現象とは云えない。多くの者から承認されない、個人的特性を帯びたものは、言語とは云えない。個人が、言語や言語発達に果たす役割を否定は出来ないが、その役割は、非常に、限定されている。個人の手になる新造語は、集団内の反響を得て、始めて、言語の特性を備える事になる。こうして、或る地方語も生れて来る。特に、交通の便の悪かった昔に於ては、種々の方言が生れて来た。日本に於ても、例外ではない。又、職業によっても、独特の言葉が生まれて来ている。

現代に於ても、社会的階級差の強い英国等に於ては、言語にも差が出来

ている。中産階級と、労働者階級とでは、行なうスポーツから、見る新聞迄違っている。特に、特権階級の行くパブリック、スクールでは、独特の言語が用いられている。これに反し、アメリカでは、国の歴史も浅く、又交通網や、通信網が発達している関係上、地方により、多少の方言はあるが、一般的に、標準語が、広く用いられている。

## F, 言語の慣習と意味について

言語には、人が意味と呼ぶ選択の要素があり、それは、個人の人格の表現である。反面、言語には、強制の要素もあり、それは、慣習の面であり、又、言語の規則である。社会生活の実際問題では、この言語の慣習的面から、人は逃れる事は出来ない。我々は、自国語を、自由に操ることが、出来るようになってきている為に、その慣習の大部分の要素に、気がつかない事が多く、我々が注意するのは、意味、即ち、選択行為のみである。慣習の面も、我々の注意をひく、個々の語を幾つか覚えると、語順が、母国語と違う事に気がつく、そこに、新しい語慣習 (word habit) を知る。学習者にとっては、外国語は、自国語よりも、はるかに多くの意味の面を、もつものと考えられる。なぜならば、外国語を学ぶ者は、本当の選択も、選択を含まぬ慣習的特質も、共に注意の対象とするからである。

言語の規則は、その言語の慣習的な面の一つを、分析的に述べたものであると云える。慣習は実在で、規則は、慣習の単なる摘要にすぎないのであり、規則は、慣習の、一時的な代用物であり、慣習に吸収されて、忘れ去られる事が、早い程良いのである。此の準備時代に、意味と慣習の見境がつかず、慣習的面を無視してしまい、本当の意味に達する事が出来ないのが実情である。

言語研究の予備的段階、即ち、「規則」の段階は、それ相応の価値があ

る。その価値とは、先づ、ある一つの言語と、一般的現実との相違を知ると云う価値である。自国語を話す技能に支払う代価は、多くの事を、無意識に行なうと云う事である。言語の慣習的な面を、人は意識しないのである。

文法的規則は、専門語を用いると、社会人類学の一区分であり、社会の集団行為の集約である。又、学習者に、文化的相対性を知らせるものである。次に、人間の出し得る音の範囲は、人間の発声器官と、聴取器官の構造によって、条件づけられている。これ等生理学的制限内に於て、社会の慣用法が、更に制約を加える各言語、又は各方言は、それぞれの音素構造を持ち、その構造の範囲内に於てのみ、その言語、その方言の使用者に許される。

(7)

英国の学者ステファン、ウルマンは、「意味」を、名前 (name) と意味内容 (Sense) の相互関係、つまり、一方が、他方を現実化する関係として定義している。故に、意味は、関係として定義されるので、静的にならず、動的になる。音結合と概念の関係は、変化しうるのであり、意味と意味範囲は、言語体系が異なれば変って来る。

或る音は、一定の表現価値をもつと考えられる。母音の i や、明るい響きをもった前母音は、何か嬉しい、楽天的な事を連想させるが、暗い母音 (a と o) は、沈んだ、しかつめらしい気分を、連想させる様である。

語の文体的価値は、語から呼び起される全く暗示的な連想による事がよくある。こうした点が、語の意味を定義するのに、難しいところである。誤って伝えられる語のニュアンスは、政治的緊張状態が、続いて居る様な国々の間では、重大な意味をもつ事になる。意味論は、非常に実際的な面をもつ様になる。

語の意味は、辞書で調べられるような、一般の基本的意味ばかりでなく



内包的意味（副次的意味、連想、ニュアンス等）も又、重要である。どの言語も、それらを話す社会と文化圏の事情を反映する。語からの連想は、語の用いられる環境や文脈によって定まる。プリミティブな民族は、社会生活の発達により出来た制度や現象の名称を、もつ事はすくない。

ドイツの人文学者ウイルヘルム、フォン、フンボルトは、次の様に述べている。「言語の違いは、異なる民族が、異なる世界観をもつことであり、言語は、ありのままの対象でなくて、対象が、心の中で作り上げた映像を映し出す事である。」

(8)

個人と同じ様に、種族の言語発達と、知能発達は、平行して進むものであり、抽象する能力と、類別する能力が前提となる。言語学習は、こうした能力を、身につける事を意味する。

次に、アメリカ新言語学者達の「意味」の考え方について述べて見ると、彼等は、言語研究の過程に、「意味」概念を取り入れる事に対して懐疑的である。もっぱら、形態を指標として、言語構造を解明しようとする。しかし彼等は、意味を無視しているとは云えない。この点について、ブルーム、フィールド (Bloomfield) は、次の様に述べている。「意味の叙述は、言語学の弱点であるが、この状態は、人知が、今よりはるかに進むまでは続くであろう。」又、「音韻論は、意味の考慮を含む」と言って、音韻論にも意味の必要な事を認めている。

(9)

彼は、言語を行動の一種とみて、他の一般的行動と同様、刺激と反応との機械的關係によって、言語の本質を説明しようと試みた。彼は、行動心理学的立場から、観念、感情、意欲等の心的現象を表わす言葉は、種々の身体的運動に対する通俗的な呼び名にすぎない事を説明する。又、音声と意味との結びつきを研究するのが、言語研究であると考えている。

彼にとっては、意味は重要な研究部門であり、意味研究を、より科学的

にするために、外部的な場と、反応を、研究対象としたのである。後のアメリカ言語学者達の「意味の放棄」は、彼に端を 発つると言われている。彼は言語資料に関する陳述では、精神主義的用語を、避けるようつとめた。彼は、科学的陳述は、物理的用語で述べられると、信じていた様であるが、しかし、こうだからと言って、彼が意味を無視するとは云えない。この事は、彼の著書「Language」の中から理解出来る。

一例を上げると、「人間は、多くの種類の音声を出し、その各種の音を利用する或る型の刺激のもとでは、人はある音声を出し、他の者は、この音声を聞いて、適当な反応を行なう。即ち、人間の言語では、異なる音声は、異なる意味をもつ、この或る音声と、或る意味との、つながりを研究するのが、言語研究である。」  
(10)

尚、意味については、次の様な説明がある。文の意味とは、話し手が、聴き手に理解してもらいたいと、思うものである。  
(11)

命題の意味とは、それが確信された時、心に喚起されるものを云う。  
(12)

命題の意味と呼ばれるものには、それから引き出される、あらゆる明瞭な必然の推論が含まれている。  
(13)

意味とは、二つの連合された概念の間関係であって、その中の一つは他よりも、相当目立って、我々の関心を引く。  
(14)

命題を実証する場を示すと云う事は、その命題が、意味するものを示す事である。  
(15)

ものの意味とは、そのものの存在が引き起す一組の期待と、同じものである。  
(16)

意味とは、復原的連鎖の事実である。部分的刺激による全体反応の、喚起である。  
(17)

意味と云う言葉は、理由と価値を含めるために、哲学的議論に根をおろ

した。

(18)

意味とは、記号過程のあらゆる局面、即ち、記号の資格、解釈志向、表示の事実、含蓄を表わし、又、心的な評価的な価値をも示す。

(19)

以上が、意味と云う言葉の、広範囲の内容を述べたものであるが、これを内容により大別すると、次の二つに分れる。

○科学的、記述的、描写的、指示的、明示的、認知的種類。

○感情的、表現的、非認知的種類。

(20)

## G、言語の伝達過程について

AとBが、会話をする場合を考えてみると、先づ、AがBに何か発言するには、衝動と、言語の外の刺激が必要になる。基本的には、AがBに情報を伝えようとする現実が、存在しなければならない。Aは、言語の作っている符号体系に通じている事が、前提となる。その内容は、慣習的に定まった一定の型をもった、複雑な構造物になる。したがって、情報は、一連のそうした要素として、Aの脳で作られてから、音声器官の神経を刺激し、その器官が、働き始める。そこで、肺から舌や唇にわたる一連の器官の活動が、始まる。この活動は、中断する事なく音波を、Bの鼓膜に送り、そこから中耳や、内耳をへて、更に脳の聴覚中枢に伝わり、当面する刺激がそこで解釈される。勿論同じ音波は、A自身の耳にも達し、Aは自分の言語音をきいて調音法を試みる。(21) Bの聴知覚は、記録する事だけでなく、解釈をする。聴覚器官の健全な事が、必要になる。聴覚障害の人々は、不利な条件におかれる。

知覚には、選択的な要素があり、それにより、不必要な刺激がすてられ、必要な刺激だけが残る。言語を理解するには、言語体系の知識が、絶対に必要である。Bは、Aの用いた符号体系に、精通していないと、充分な理

解が出来ない。Bは、Aを完全に理解するためには、Aが心の中で思い浮べた概念や、連想と、同じものを得なければならない。コミュニケーションが、完全に行なわれていると、Bは、自分と同じ言葉で、Aと同じ事を思うようになる。しかし、こうした事は、実際は、不可能に近い。AとBは、経験が全く同じと云う分けではないので、連想等を、全く同じにする事はない。教養の程度、育ち、環境、意見等について、違いが大きければ大きい程、その差は大きくなる。

一定の形のない現実には、Aの脳の中に蓄えられている言語体系にしたがって作られる。Aの脳からの神経刺激は、ばらばらであるが、この神経刺激で始まった筋肉活動は、休みなく行なわれ、筋肉活動によってできた音波も、とぎれる事がない。耳や脳が、言語体系で定められている選択解釈をするので、そうした音波は、一連の互いに独立したばらばらの言語要素に固定され、Bは、こうした要素により、一定の形のない内容実体についての概念を、思い起こす。

(22)

人の理解の可能性は、異なる要素（音素、形態語、構造）を予測出来るか、どうか大きくかかる。聴覚的弱さを補強するものとして、正確な習得、語を多く覚えること、鋭敏な知性をもつ事が、必要になる。言葉に精通すると、物事に対し、より充分な推測と理解をもたらすものである。

尚、言語の外の関係、即ち、外的事情と、言語で表わされない表現手段即ち、身振り、表情、音色等が、コミュニケーションに、強い意義をもっている。

## 結 び

言語についての研究は、今後も、多くの研究者により、広く、深く続いて行くものと思います。今時は、それについての自分の考察の一端を、述

べた次第です。(1977. 10.)

Notes:

- (1) John P. Hughes: *The Science of Language*, Random House, New York, 1962.
- (2) The Odore Huebener: *How to Teach Foreign Languages Effectively*, New York, 1959.
- (3) 上に同じ。
- (4) E. H. Sturtevant: *Linguistic Change*, Chicago, 1917.
- (5) A. P. Weiss: *A Theoretical Basis of Human Behavior*, 1929.
- (6) Colin Cherry: *On Human Communication*, 1957.
- (7) W. F. Twaddel: *Meanings, Habits and Rules*, 1953.
- (8) Stephen Ullman: *Semantics*, 1962.
- (9) L. Bloomfield: *Language*, 1935.
- (10) 上に同じ。
- (11) A. Gardiner: *The Definition of the word and the Sentence*, *British Journal of psychology*, 1922.
- (12) N. Campell,: *Physics, The Elements*, 1920.
- (13) C. S. Peirce,: *Collected papers*, 1934.
- (14) F. Anderson,: *On the Nature of Meaning*, *Journal of philosophy*, 1933.
- (15) A. J. Ayer,: *Demonstration of the Impossibility of Metaphysics*, *Mind*, 1934.
- (16) C. W. Morris,: *Pragmatism and Metaphysics*, *Philosophical Review*, 1934.
- (17) H. L. Hollingworth,: *Meaning and Psycho-physical Cotinuum*, *Journal of philosophy*, 1923.
- (18) W. E. Hocking,: *Philosophical Review*, 1928.
- (19) C. W. Morris,: *Signs, Language, and Behavior*, 1946.
- (20) C. L. Stevenson,: *Ethics and Language*, New Haven, 1944.
- (21) Colin Cherry,: *On Human Communication*, 1957.
- (22) Bertil Malmberg,: *Structual Linguistics*, 1956.

Bibliography:

- John P. Hughes,: *Linguistics and Langnage Teaching*, New York, 1968.  
Charles, C. Fries,: *Meaning and Linguistic Analysis*, Language, 1954.  
L. Bloomfield,: *For The Practical study of Foreign Language*, 1942.

L. Bloomfield,: Linguistic Aspects of Science, Annotated by T.Torii, Tokyo, 1963.

T. Izumi,: New Current Report, Eichosha, Tokyo, 1977.

Bertil Malmberg,: Sproket och människan, stockholm, 1970.

translated by S. Okazaki.Tokyo.

G. Doty & J.Ross,: Life in the U. S. A, New York, 1960.

W. Nelson,: The Londoners, London, 1974.